

第五講 近代歴史学と歴史主義への道

レポート講評

ユビキタス状況の現出→国境を超えるネット空間（全世界的）

SNS と LINE の普及→初音ミク現象

ISIL やアルカイダによる利用

イスラム過激主義による利用

個々のキーワードの説明は出来ても、自分史を大きな歴史のなかに位置付けていない

古代

ヘロドトス、ペルシア戦争の歴史

トゥキュディデス、ペロポネソス戦争の歴史

クセノフォン、ペロポネソス戦争～コリントス戦争～ボイオティア戦争～マンティネイアの戦い

同時代史

政治史

循環史観→教訓

タキトゥス、『年代記』：ティベリウスの即位（14年）～ネロの自殺（68年）

中世

年代記 *annals*（年表に近い）と *chronicle*（事件についての詳細な記述）の伝統

『世界年代記』・・・天地創造から始まる人類史

『アングロ・サクソン年代記』（9～12世紀：アルフレッド大王）・『テオフアネス年代記』（9世紀：284年のディオクレティアヌス帝即位から813年のミカエル1世の敗北と退位まで）など

近世

『イタリア史 *Storia d'Italia*』（1490～1534年の同時代史を著す：1537～40年）

グイッチャルディーニ（Francesco Guicciardini:1483～1540年）：人々は自己の利益に基づいて行動する

『諸国民の風俗と精神について *Essai sur les Moeurs et l'esprit de nations*』1756年、ヴォルテール

『人間精神進歩の歴史 *Esquisse d'un tableau historique des progrès de l'esprit humain*』1795年、コンドルセ（1743～84年）

過去をあるがままに理解する（ランケ）

ジョージ・P・グーチ（林健太郎・孝子訳）『19世紀の歴史と歴史家たち』（上・下）筑摩書房、1971・74年。

スコットの作品の荒唐無稽さに衝撃を受ける。

18世紀の啓蒙主義への反発

理性の自己展開

19世紀の科学としての歴史学。

歴史家から歴史学者へ＝職業としての歴史研究者（大学）

史料批判（外的批判と内的批判）：近代の産物（文献学の発展）

権威と同時代性を基準。

文献学の発展。

『コンスタンティヌス帝の寄進状』：病気を教皇シルヴェステル1世の洗礼によって治癒・教皇に西ヨーロッパにおける支配権を譲る。

8世紀中ごろに東ローマ帝国の干渉に抵抗するために偽造←726年 レオン3世による聖画像崇拜禁止令をめぐる危機。

ロレンツォ・ヴァッラによる批判（15世紀）。

ローマ時代のラテン語の用法と異なる。

科学（Wissenschaft）としての歴史学の確立。

自然科学（Science）との相違。

研究方法としての厳密性。

史料批判・・・外的批判・内的批判。

権威。

同時代性。

国家を独立した意思を持つ至高の存在ととらえる。

外交に着目。

外交官の意思と合理性。

国内の様々な圧力から独立。

内政の排除。

テキストをベネツィア大使の外交報告書（国家文書・行政文書）に求める。←客観性を求める。

『ローマ的ゲルマン的諸民族の歴史』(*Geschichte der romanischen und germanischen Völker von 1494 bis 1514*, 1824)

『近代歴史家批判』(*Zur Kritik neuerer Geschichtsschreiber*, 1824)

グイッチャルディーニを批判。事実の歪曲と誤認。二次史料に依存。経験的に解釈と評価（経験主義的解釈学）。

「本来いかにあったか *Wie es eigentlich gewesen.*」

事実を国民史の枠組みの中に埋め込む。